

Title	死と自殺の概念発達と定義
Author(s)	駒井, 健太郎
Citation	生老病死の行動科学. 2005, 10, p. 157-164
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6416
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

死と自殺の概念発達と定義

The development of concepts of death and suicide

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 駒 井 健太郎

Abstract

The development of the conception of death has been studied since the early year of the 20th century with several social backgrounds, such as wars or rate of suicide in childhood. The concept of death is measured by questionnaires covering at least following components: Non-functionality, irreversibility, universality, causality, and personal mortality. The concept of death is acquired when these components are completely understood.

According to the previous studies, one of factors that have main effects on the conception is considered to be age, because the conception of death is highly correlated with the development of cognitive abilities. Also the experiences of bereavement or illness are considered as other influential factors on the conception.

Although suicide is one cause of death, the conceptions of death and suicide develop differently. As develop cognitive abilities, children can understand suicide is an exceptional behavior and motivated by comprehensive social and psycho dynamics.

Key word : death, concept, children, suicide

I はじめに

死の概念発達の研究は、半世紀以上も昔に端を發し (Normand, 1992)、さまざまな社会的問題を背景に、今現在でも研究が続けられている。子どもの死の概念発達についての研究は、Sylvia Anthony (1939) や Maria Nagy (1948) を先駆者とし、認知発達や希死概念発達などとも関連しながら発展している。特に核家族化傾向にあるための死別体験の減少、小児ホスピスの正当性、いじめや自殺などの社会的問題の増加に伴い、特に教育の現場、病院、カウンセラーなどからその理論の需要と応用が強く求められる (Kenyon, 2001)。本論では、死の概念発達における研究の歴史から死の概念を定義し、発達心理学と認知心理学からの知見、実際の死別体験の影響、希死概念との関連について述べていく。

II 死の概念研究の略歴

死の概念に関する研究はおおよそ60年前、Anthony (1939) による死のイメージに対する子どもの反応の研究に始まったとされる。そして第二次世界大戦後に子どもの死生観や死の概念発達への関心は多いに高まった (Mishara, 1999)。Nagy (1948) は死の概念発達と認知発達との関連を明らかにし、この分野での研究を飛躍的に発展させた。Nagy (1948) によると、子どもは死とは何か、どうして人は死ぬのか、人は死んだ後にどうなるのかという、三つの疑問を持って死に向かい合ものとした。Nagy (1948) は死の概念と、年齢との関連を明らかにし、死の概念は3歳程度から発生し、10歳程度でほぼ正しい死の概念が形成されることを発見した。Nagy (1948) の提示した死の概念発達は、ピアジェ認知発達段階に酷似しており、死の概念

発達には認知能力の発達が不可欠であることを示している。また、Melear (1973) は、死の概念発達を4段階にわけ、年齢に応じて階層的な概念発達をすると考えた。

Kastenbaum & Costa (1977) は、子どもの死の概念発達に関する研究には、技術的な問題や調査方法の問題など様々な障害があるが、社会的にも精神健康の点においてもたいへん有益であるとしており、幅広い分野からの影響を考慮すべきであるとしている。Kastenbaum と Costa (1997) は子どもの死の概念に関して様々な研究をし、たいへん秀逸な報告をしており、この頃から死の概念発達は、認知能力のみならず、文化、メディア、そして死別体験などが影響されると様々な分野で取り扱われ、また、現代においても研究が進められている (Kenyon, 2001)。

Ⅲ 死の概念の定義

以上に述べた研究では、死の概念を構成する要素については具体的に言及されていなかった。この問題に伴い1980年代前半から、何が死の概念構成に影響を及ぼすのかということについて着眼されるようになった (Kenyon, 2001)。最も一般的に死の概念構成を定義する要素として使用されるものは、non-functionality, irreversibility, universality, causality, personal mortality であるとした (Speece & Brent, 1984)。non-functionality は、死は生態的機能を失うことであるという理解、irreversibility は死の永続性、死んだ人間は蘇らないという理解、universality は、死は全ての生命に共通であることの意味、causality は死の原因の理解、personal mortality は、死は自らにも必ずおとずれるものだという理解である。これらは比較的頻繁に使用される要素であるが、例えば Kane (1979) の研究のように、これら以外にも realization (死の現実性)、separation (物理的に死体はどこに行くのか)、immobility (肉体活動の停止)、insensitivity (精神活動の停止)、appearance (死体の表面的な形状)、personification (有機物と無機物の相違) などの理解も死の概念を構成するために必要な要素であるとしているものもある。また、Kane (1979) は、相対する2つの要素、例えば permanent vs. temporary (恒久的なものか、瞬間的なものか) といったものや natural vs. magical event (自然なものか、超自然的なものか) といったものの中から全て正しいものが選択できるようになって、初めて死の概念が構成されると考えた。また、Koocher (1974) は universality に加えて、finality (死の終極性)、unpredictability (死の予期)、inescapability (死の不可避性) に関しての自由回答法によって死の理解度を測定する質問紙を提唱している。

Ⅳ 死の概念の構成要因

子どもの死の概念に影響を与える要因として、性別、家庭の経済状態、文化や宗教、認知能力、死別体験などが挙げられる。性別や家庭の経済状態に関して、例えば男の子は死の原因を暴力などが多く、女の子は病気などが多いと考える傾向にあるなど、概念の要素の習得に若干の差異は見られるが、発達速度に違いは優位な差が見られない (Jenkins & Cavanaugh, 1985-1986)。文化や宗教は多様であるが、死の概念発達は子どもに共通した発達段階が見られ、有意に影響しているという結果は得られていない (Brent, Speece, Lin, Dong, & Yang, 1996)。ここでは死の概念に最も影響力が大きいとされる認知能力についてと、非常にその影響力について曖昧とされる死別体験の二要因に特に注目し述べていく。

1. 年齢と認知能力

死の概念の構成過程では、年齢、つまり認知能力の発達が最も強い影響を及ぼす。冒頭で述べたように、Nagy (1948) の報告した子どもが持つ死の概念は、Piaget (1951) が提唱した発達段階と高い相関を持つことが明らかになっている (Koocher, 1974)。しかし、先述した死の概念を構成する要素の全てが、認知能力に相対して発達していくというわけではない。子どもたちは通常、はじめに死の存在そのものに気づき、non-functionality, irreversibility を習得していく。しかしこの段階では、「人は死んだら動かなくなる」「人は死んだら呼吸をしなくなる」といった死の表層的なラベル付けをしているに過ぎず、universality, causality、そして personal mortality を習得していくことによって死の概念を理解していくと考えられる (Kane, 1979)。また、Orbach, Gross, Glaubman & Berman (1986) の研究によると、やはり irreversibility, universality、そして彼独自の要素である finality (死の終極性) が現れ、最後に causality を習得するとされる。しかし、興味深いことに、認知発達と高い相関を示すとされる死の概念には、数値上低下する時期がある。Orbach, Weiner & Mar-Even (1994-1995) の研究によれば、8歳から9歳では、特に他人の死に際して曖昧な理解を示す。同様の現象は過去の研究においても報告されている (e.g. Alexander & Adlerstein, 1958; Orbach et al., 1986)。Yalom (1980) によれば、この時期には、死に対する恐怖や不安が増大するため、死の存在を認識することを避ようとするからであるとした。また、Yalom (1980) は8歳から9歳にこれが起こる理由として自我の発達が関係しているとし、この時期の子どもは死と性に関して不安が飛躍的に増大するからであると考えた。中国とアメリカの子どもを対象とした Brent, Speece, Lin, Dong & Yang (1996) の研究によると、自我の発達時期にある子どもだけでなく、15歳程度の思春期においても、特に irreversibility の理解が曖昧になる時期があるとされる。Brentらによると、これはアメリカ、中国の異文化間においても共通し、神の存在、来世の存在、死後の世界などの超自然的な解釈が発達し、死の概念にも加えられるためであると考察した。Noppe & Noppe (1997) の研究においても同様の現象が報告されており、これも天国、地獄などといった死後の世界感などの発達によって、死をより複雑に解釈するようになるためであるとされている。このように死の概念発達は認知能力の発達に高い関連があるといわれているが、irreversibility に関しては、加齢は関係ないとしているものもある (e.g. Brent & Speece, 1993; Candy-Gibbs, Sharp & Petrum, 1984-1985)。

2. 死別体験と病理体験

死の概念構成に影響を及ぼす要因のひとつとして、病理体験や死別体験が上げられる。例えば末期の病気を持つ子どもを対象とした Bluebond-Langer (1979) の報告によると、末期の病気を持つ子どもは、親やメディアから死についての情報を与えられることがなくても、自ら死について考え始めるようになる。Bluebond-Langer (1979) は、末期の病気を持った子どもたちは、大人と死についての話題を持つことは少なく、同じ境遇の子どもと死についての恐怖や会話を共有することのほうが多いことを発見した。Jay, Green, Johnson, Caldwell & Nitschke (1987) の癌の子どもを対象とした研究では、癌の子どもは健康な子どもよりも personal mortality の理解がより発達し、3歳、4歳程度では死を一種の罰のように認識していることが多いとされている。これは病気の子どものは、例えば病院などで、自分と同じ境遇の子どもとの死別体験を多くしているためであると考えられる。5歳の末期の病気を持つ子ども同

士で話しをさせた Nitschke, Humphrey, Sexauer, Catron, Wunder, & Jay (1982) の研究もこれと同様に、末期の病気を抱える子どもは、早い段階で大人と同じような死の概念をもつとしている。また、近い人物との死別体験をした子供は、死の概念を構成する要素の習得順序に違いが見られ、特に non-functionality や causality は早くに理解していくとされ、全体の死の概念発達も早いとされる (Kane, 1979)。また、特にトラウマになるような死別体験では、死についての反応が大きく異なり、死の概念に大きな影響をもたらすとされる (高柳 & 辻尾, 2003)。

一方で、Cotton & Range (1990) の研究では、死別体験をした子どもはむしろ死についての認識、特に causality と universality については理解が遅くなるとされている。また、子どもの死の概念発達と死別体験との関連には懐疑的なものも多く、Jenkins & Cavanaugh (1985-1986) によると、死別体験と死の概念には全く相関が見られないとされている。また、どんなトラウマ的な死別を経験した子どもであっても、統制グループと死の概念発達に違いはないとしているものもある (Mahon, 1993)。

病理体験の影響についての研究は一貫性があるのに比べ、死別体験は死の概念構成に影響与えると示唆する先行研究は多いが (e.g., Bolduc, 1972; Zweig, 1977)、どう与えるのかというメカニズムについては明確になっていない。この分野の全体の風潮として死別体験は死の概念構成に影響はないとする意見を支持する方向にあるように見えるが、死別体験の影響に関しては実験のデザインや、対象者によって結果が大きく変化し、死別体験が与える影響については十分な結論に達していない状態であると言える (Kenyon, 2001)。

V 希死概念

希死概念は死の概念から派生するものであるが、厳密に言えば本質は別のものである。定義については後述するが、病気や事故で死んでしまうことと、自ら死を望むことは別のものであると言える。ここでは広義での死の概念が包括する、希死概念の研究についての簡単な略歴、死の概念との差異と構成要素、発達段階、そして希死概念研究の問題点の順に述べていく。

Carlson, Asarnow & Orbach (1987) の行った、自殺を試みようとした人や自殺をした人を知っているかどうかと聞いたアンケートによると、テレビやニュースなどを通して知っていると答えた子どもが多く、中には実際に家族や友人が自殺したという経験を持つ子どももいたと報告している。しかし、これだけでは希死概念を理解しているとは言い難い。これについては Dobert & Nunner-Winkler (1985) が、他者の自殺動機の理解には実社会での経験が必要不可欠であるとしている。Dobert & Nunner-Winkler (1985) は、向社会性が確立された14歳から22歳の青年を対象に、自殺動機についてのインタビューを行った。その結果、自殺のどのウイを理解過程は五段階があるとした。まず、自殺動機は外界からの一時的な要因によって高められるという比較的理解が浅い時期を第一段階として、個人の社会的背景、過去、さらに個人内の状態が、自殺動機影響するという理解が現れる時期を第五段階と定め、自殺動機についての理解を階層的にとらえた。また Dobert & Nunner-Winkler (1985) は、自殺の理解には年齢、経済状態、個人の経験などが複合的に影響をおよぼすものであると考えた。

Normand & Mishara (1992) は事故や病気などによる死と、自ら死を選ぶということには多きな隔たりがあり、死の概念と希死概念の形成に与える要因は異なったものであると考えた。Carlson et al (1987) は、自殺が人間特有の行為であることの理解が必要なため、死の概念

と希死概念の相違を提示している。そのため、希死概念の理解度を測定する質問紙には、先述した死の概念を構成する要素ではなく、intentionality, motive, means, psychosocial dynamicなどが因子として含まれている (Carlson et al., 1987)。intentionality は自殺の言葉の意味、自殺と死の違いは何かという問いで、motives は人が自殺を冒す動機、means は人がどうやって自殺を冒すのか、そして psychosocial dynamic は自殺が人間独自のものであるという理解である。

Normand et al (1992) の研究によると、7歳未満の子どもは自殺や死の話題に対して抵抗感を抱かず、7歳程度から正しい自殺という言葉の意味を理解し始め、11歳程度でほとんどの子どもが希死概念を理解する。Normand et al (1992) の研究や Carlson et al (1987) の研究によると、希死概念の熟成には年齢と認知能力の発達とが高い相関を示しているが、直接的、間接的な自殺に関する経験が影響を及ぼすかどうかを明確にするデータはなく、経験が希死概念に影響を及ぼすとする Dobert et al (1985) の研究を裏付けるものではない。ペットや親戚などを含めると小学校の低学年でも死別経験をしている子どもは比較的多いのに比べ、直接的、間接的に関わらず自殺の経験をしている子どもは、Normand et al (1992) の研究でも全体の5%ほどしかおらず、明確な考察を上げるには不十分であると考えられる。このことから Normand et al (1992) は、希死概念の形成には自殺の経験ではなく、子どもの認知能力のほうが高い影響を及ぼすと結論づけた。また彼らは、自ら死を選ぶことと通常の死とでは大きな相違があるとしながらも、認知能力の低い子どもにとって自殺とは多くの死因の一つでしかなく、自殺の経験というよりは、死別経験から希死概念を理解していくのではないかと考察している。

希死概念発達の研究において、大いに問題になるのは、実験現場における教示の内容である。Mashara (1999) は「自殺 (suicide)」という言葉ではなく、「自分を殺す (killing oneself)」「自分の命を奪う (taking one's life)」という言葉を使うことによって理解度は変動すると指摘している。上記に取り上げた Normand et al (1992) の研究では、子どもが「自殺」という言葉を知らない時点でインタビューを終了するため、認知能力との相関が高くでる結果になる。Mashara (1999) のインタビューでは6歳から7歳の被験者の多くが「自殺」という言葉を正しく理解していなかったが、「自分を殺す (killing oneself)」などという言葉を使えばインタビューの続行が可能であることが明らかにされた。Mishara (1999) は、小学校低学年では、自殺の方法など表面低なラベル付けを行うにとどまり、10歳程度から自殺を図る社会的背景や個人内動機などを思慮し、総合的な希死概念に関する理解が始まるものと結論づけた。

VI おわりに—死の概念研究の問題と必要性—

死の概念の測定には様々な障害が存在する。例えば、多くの研究は横断的に死の概念を構成する要素を測定しており、縦断的に概念の発達を測定した研究は非常に少ないことが挙げられる (Kastenbaum & Costa, 1977)。また、中には絵や物語、遊びの中から死の概念を測定しているものも多く、この解釈の困難も問題として挙げられる。そのほかにも一般化された測定方法が存在しないことや、特に幼い子どもへのインタビューにおいて、分かりやすい言葉の選出なども難しい問題であると言える (Stambrook & Parker, 1987)。そのほかの先行研究には、十分な統計的分析に欠けるもの、言語能力の十分に発達していない子どもに対するインタビュー、研究者の主観による子どもの概念の分類、また非常に少ない人数を対象とした研究など、子ど

もを対象とした死の概念の研究には、多くの問題が存在している (Kenyon, 2001)。しかし、冒頭に述べたように子どもの死の概念発達に関する研究は多くの需要がある。例えば、子どもがもつ死の概念を理解することの意義の一つとして、適確なデス・エデュケーションの構築がある。日本ではこれまで「死」に関しての話題がタブー視され、「死に関する教育 (デス・エデュケーション)」の重要性は近年まで見過ごされてきた (兵庫・生と死を考える会, 2004)。だが、現代では諸外国でも自殺の低年齢化が問題視されており、(Cohen-Sandler, Berman & King, 1982)、日本においてもそれがひとつの社会問題になっているといえる。また、自殺だけではなく犯罪の低年齢化が進む中、子どもに生命の大切さを論ずことは大変重要な意味を持っていると考えられる。そのほかさまざまな社会的背景を伴い、死の概念についての研究は、いくつかの問題点をより改善させ、その需要とともにより深く研究されていく必要があるのではないだろうか。

引用文献

- 高柳奈生 & 辻尾佳澄 2003 犯罪によってきょうだいと死別した子どもの人間的成長をどう支援するか 社会学部紀要 第95号、259-268.
- 兵庫・生と死を考える会 2004 幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査 (財) 21世紀ヒューマンケア研究機構.
- Anthony, S. 1939 A Study of the development of the concept of death. *British Journal of Educational Psychology*, 9, 276-277.
- Alexander, I. E., & Adlerstein, A. M. 1958 Affective response to the concept of death in a population of children and early adolescents. *Journal of Genetic Psychology*, 93, 167-177.
- Brent, S. B., Speece, M. W., Lin G., Dong, Q., & Yang, C. 1996 The Development of the concept of death among chinese and U. S. children 3-17 years of age: From binary to "Fuzzy" concepts? *Omega-Journal of Death and Dying*, 33(1), 67-83.
- Brent, S. B., & Sharp, K. W. 1993 "Adult" conceptualization of irreversibility: Implications for the development of the concept of death. *Death Studies*, 17, 203-224.
- Bluebond-Langer, M. 1977 *The Private Worlds of Dying Children*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 1992 「死に行く子供の世界」死と子供たち研究会訳 日本看護協会出版会, 東京.
- Bolduc, J. 1972 A developmental study of the relationship between experience of death and age and development of the concept of death. *Dissertation Abstracts International*, 33, 2758A.
- Candy-Gibbs, S. E., Sharp, K. C., & Petrun, C. J. 1984-1985 The effect of age, object and cultural/religious background on children's concepts of death. *Omega: Journal of Death and Dying*, 15(4), 329-346.
- Carlson, G. A., Asarnow, J. R., & Orbach, I. 1987 Developmental aspects of suicidal behavior in children. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 26, 186-192.
- Cohen-Sandler, R., Berman, A.L., & King, R. 1982 Life stress and symptomatology:

- Determinants of suicidal behavior in children. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 21, 178-186.
- Cotton, C.R., & Range, L. M. 1990 Children's death concepts: Relationship to cognitive functioning, age, experience with death, fear of death, and hopelessness. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19(2), 123-127.
- Dobert, R., & Nunner-Winkler, G. 1985 Interplay of formal and material role-taking in the understanding of suicide among adolescents and young adults: II. Native suicide theories and the structural approach. *Human development*, 28, 313-330.
- Gothelf, D., Apter, A., Brand-Gothelf, A., Offer, N., Ofek, H., Tyano, S., & Prerrer, C. R. 1998 Death Concepts in Suicidal Adolescents. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 37, 1279-1286.
- Jay, S. M., Green, V., Johnson, S., Caldwell, S., & Nitschke, R. 1987 Difference in death concepts between children with cancer and physically healthy children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 16(4), 301-306.
- Jenkins, R. A., & Cavanaugh, J. C. 1985-1986 Examining the relationship between the development of the concept of death and overall cognitive development. *Omega: Journal of Death and Dying*, 16(4), 301-306.
- Kane, B. 1979 Children's concepts of death. *The Journal of Genetic Psychology*, 134, 141-153.
- Kastenbaum, R., & Costa, P. 1977. Psychological perspective on death. *Annual Review of Psychology*, 28, 225-249.
- Kenyon, B. L. 2001 Current research in children's conceptions of death: A critical review. *Omega: Journal of Death and Dying*, 43(1), 63-91.
- Koocher, G. P. 1973 Childhood, death and cognitive development. *Developmental Psychology*, 9, 369-375.
- Mahon, M. 1993 Children's concept of death and sibling death from trauma. *Journal of Paediatric Nursing*, 8(5), 335-344.
- Melear, A. 1973 Children's conception of death. *Journal of Genetic Psychology*, 123, 359-360.
- Mishara, B. L. 1999 Conception of death and suicide in children ages 6-12 and their implications for suicide prevention. *Suicide and Life-Threatening Behavior*, 29(2), 105-118.
- Nagy, M. 1948 The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73, 3-27.
- Nitschke, R., Humphrey, G. B., Sexauer, C. L., Catron, B., Wunder, S., & Jay, S. 1982 Therapeutic choices made by parents with end-stage cancer. *Journal of Pediatrics*, 101, 471-476.
- Noppe, I. C., & Noppe, L. D. 1997 Evolving meaning of death during early, middle and late adolescence. *Death Studies*, 21(3), 253-275.
- Normand, C., & Mishara, B. 1992 The development of the concept of suicide in children. *Omega: Journal of Death and Dying*, 25(3), 182-203.

- Orbach, I., Gross, Y., Glaubman, H., & Berman, D. 1986 Children's perception of death in humans and animals as a function of age, anxiety and cognitive abilities. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 26, 453-463.
- Orbach, I., Weiner, M. & Har-Even, D. 1994-1995 Children's perception of death and interpersonal closeness to the death person. *Omega-Journal of Death and Dying*, 30(1), 1-12.
- Piaget, J. 1951 *Child's Conception of the World*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Stambrook, M. W., & Brent, S. B. 1992. The development of the concept of death in childhood: A review of literature. *Merrill Palmer Quarterly*, 33(2), 133-157.
- Yalom, I. D. 1980 *Existential Psychotherapy*. Basic Books, New York.
- Zweig, A. R. 1977 Children's attitudes towards death. *Dissertation Abstracts International*, 37, 4249-4250A.